

お茶の時間 令和と短歌と

偕行誌

編集委員

喜田 邦彦 陸自66

新天皇の御即位に伴う改元は、予告されていたとはいえ、多くの国民に敬愛を持って受け入れられた。日本最古の歌集『万葉集』が元号「令和」の出典となり、にわかに脚光を浴びている。

NHKは、平成時代の心模様を描いた「平成万葉集」を3回に分け放映した。奈良の昔から受け継がれた「三十一文字の文芸」は、東日本大震災、少子高齢化という重いテーマも避けず、若壮・老の男女が自分の心に向き合い、ちよつとした日常の喜び、悲しみ、驚き、発見を詠っていた。

評論家の福田和也氏は、日本の文化・短歌について、次のように述べている（『日本人であること』）。

「短歌の継承を通じて感じたことは、日本人は特有の感受性というか、文化というか、形がある。日本が続いてきた要因は、普通の町や村に住んでいる人たちの普通の暮らしが文化であつて、そのことが日本の歴史が今まで続いてきた根本にあると思う。

中国や欧州の文化は、王様、貴族、才能ある一部の人による創作が受け継

がれ、他の人はそれに参加する資格を与えられなかった。しかし日本では、万葉時代から一般の人たちが、自分の言葉で、感性や経験を表現してきた。

どんな民族にも悲しみや喜びがあるが、日本人はそうした人々の悲しみや生活の実感を表現する手段を考え、その人たちの表現を作品として残す形式を受け継いできた。その一つが、短歌であり、近世に俳諧が加わった。

このことは、日本人が文学的才能に秀でているということではなく、日本人がその方法を発明し発展させたことによる。近年、米国や欧州で俳句を真似る人が増えているが、彼らの世界にはギリシヤの詩や古代詩が残っているが、そのままでは読めなくなっている。

日本人は、短歌や俳句の形で、神話時代の斎宮、農民、防人たちと同じ言葉で、心を通わせることができる。そうした文学が今に伝えられ、それがいまだに新しいことは素晴らしい。私たちは、それに感謝し、誇るべきこととして次の時代に伝える責任がある……」

自分の生まれた土地、氏神の社、菩提寺等から離れてしまった現代の日本人。しかし短歌・俳句は、時間と空間を超越して対話できる手段である。偕行誌はそうした文芸作品も掲載している。防人老兵・令夫人が心情を吐露する姿を、是非、お茶でも召し上がりながらご覧いただきたいものです。